



第21号 2017.10.20発行  
 発行者：株式会社協進印刷  
 編集者：JO編集委員会

# 未来のために「今」 自分たちができることを

株式会社スリーハイ 代表取締役 男澤 誠さん



産業用ヒーター、温度センサーなどの開発・製造・販売を手がける株式会社スリーハイの2代目社長。自社のCSRの一環で地元小中学校のキャリア教育プログラムに関わったのを契機に、一般社団法人横浜もの・まち・ひとづくりを設立。地域ぐるみでの教育支援活動に取り組んでいる。  
 株式会社スリーハイ <http://www.threehigh.co.jp/>  
 一般社団法人横浜もの・まち・ひとづくり <http://2080.jp/>

**江森**：スリーハイさんは横浜型地域貢献企業の中でもかなりラジカルにCSRを進めておられると予々感じてはいたのですが、ついにと言いますか、この度一般社団法人を設立され、そしてまたこんなに素敵なペースをオープンされるなど、ますます突き抜けてるなあ（笑）と感心しています。

**男澤**：周りから見るとそういうふうに見えるのかもかもしれませんが、僕たちにとってはとても自然なことなのです。元々スリーハイが地元の小学校と連携して始めた工場見学が、年々規模が大きくなっていった、今では3年生全員が社会科見学でこの東山田工業地域を練り歩く「まち探検」という事業に発展しています。そうなる周囲の工場にも協力してもらわないと成り立たないですし、実際多くの企業さんが協力してくれています。ところが、僕たちが始めたものだから、メディアの取材を受けて名前が

出るのはいつも「スリーハイ」なんです。みんなやっているとそれにほどうなんだろうという思いがずっとありました。それならば別の組織を作ってみるなでこの東山田という地域を面的活性するような形にした方がいいだろうと判断したのです。

**江森**：男澤さんがやっていることはいわゆる「地域で子供を育てる」ということで、それが良いことであり、必要なことだといふのは「総論」としては誰もが理解できると思いますが、それを「自分の会社でやる」となると、それがどうもつながらないというか、「なんでウチが？」とか「いやいや、それどころじゃないよ」となるのが常ですよ。周囲の企業さんをどうやって説得しているのですか？

**男澤**：いま日本の製造業の技術はどんどん国外に流出してしまつて右肩下がりですよね。でも僕は「日本のウリは製造業」だと

思っているし、もう一度そういう元気な製造業を取り戻したいんです。それには今の子供たちに早い段階から日本の技術や製造現場を見てもらつて興味をもつてもらうのが、時間はかかるかもしれないけど、一番いい方法なんじゃないかと思うんです。余裕があるからでも、ヒマだからでもなく、たまたま僕はそれに気づいたからやり始めてるので、あなたも一緒にやりませんか。と誘つと少し自分事になってくるというか、考えてくれるようにはなりますね。

**江森**：私も一応製造業のはしくれですが、日本の製造業つてもっと危機感あるのかと思つてましたが、東山田はそれでもなさそうですね。

**男澤**：いわゆる製造業の集積地域って、東京の大田区みたいにみんな仕事まわしてるみたいなのを想像されると思うのですが、東山田はまったく逆で、それぞれがお

客さんをしつかりもつて個別にやっているの、皆さんそれなりに危機感はあるのかもしれないが、それを共有する基盤がないというか、そもそも他の会社のことをあまり気にしないんですよね。でも、日本全体でみたときには、もうちょっと未来に対して危機感を持っている社長が多くてもいいんじゃないかなとは思っていますね。

**江森**：今年の大学新卒者が120万人ぐらいで、10歳の子たちが100万人ぐらいなので、これから10年ぐらいで2割ほど減ることになります。中小企業にとってはますます人材難が深刻化しますよね。

**男澤**：オリンピックのメダリストのインタビューなどで、なんでアスリートを目指したのかというような質問に、よく「子供の頃の経験が」という話がでてくるんですよ。やはり子供の頃の経験とか記憶って、人生に大きな影響を与えますよね。僕には2人



社員として地域コーディネーターとして大活躍の蟹江さん（右）  
後ろにはヒーターを作る社員さんの姿が

子供がいるので、仕事の話をするとともに興味をもってくれます。やっぱり子供って、特に男の子は工作とか実験とか、ものづくりにつながらることが好きじゃないですか。そういう経験を子供の頃にたくさん

江森：学校との連携はどうやって始まったのですか？  
男澤：2010年に横浜型地域貢献企業に認定されたのですが、認定されたからには何かしないといけないなと思いつつも、何をしたいのかわからず、山下公園の清掃にいたり、全然関係ない地域でボランティアしたりしてたんです。今思えば何やっただって話なんですけど、その当時は本当に何していいかわからず、でもマークをもらっていいながら何もしていないというのは恥ずかしいことだなと思って、東山田中学校のコミュニケーションハウスを訪ねたのが最初です。

さんしてもらったことによって、製造業に対する考え方も変わってくるんじゃないかかと思えます。でもそれには「今」やらないと。今始めても結果が出るのは10年ぐらい後ですから。確かに東山田なんて横浜市全体からみたら小さなエリアではありますが、でも自分たちでできることは、自分たちでやるうよーと熱く語っています。

江森：横浜市の小学校は全国から見学に来るぐらいキャリア教育も含めた、いわゆるアクティブラーニングのレベルは高いんです。でもそれが中学にいくと受験対策が始まるので、ややアクティブラーニング的な要素が減り、高校にいったら完全に大学進学が目的化してしまいキャリア教育の機会

はほとんどなくなってしまいますよね。  
男澤：そういう意味ではこの地区は特殊かもしれませんが。東山田中学校区の小中学校はキャリア教育にすごく熱心なんですよ。小学校で「まち探検」、中学校で「職業体験」という9年間のプログラムができあがっているんですね。そういう学校の熱心さにこちらが乗っかってる面もありますね。

江森：学校との連携はどうやって始まったのですか？  
男澤：2010年に横浜型地域貢献企業に認定されたのですが、認定されたからには何かしないといけないなと思いつつも、何をしたいのかわからず、山下公園の清掃にいたり、全然関係ない地域でボランティアしたりしてたんです。今思えば何やっただって話なんですけど、その当時は本当に何していいかわからず、でもマークをもらっていいながら何もしていないというのは恥ずかしいことだなと思って、東山田中学校のコミュニケーションハウスを訪ねたのが最初です。

江森：え？ということとは認定がきっかけとこと？  
男澤：そうですねーあの制度がなかったらたぶん何もやってないです。あれは僕の中で何かが変わったきっかけでしたね。  
江森：いや、それはうれいいなあ。そういう人がいるというだけで、今までの苦労が報われる思いがしますよ（笑）。すみません話を元に戻しましょう。  
男澤：とにかく何もわからないまま東山田中学校のコミュニケーションハウスを訪ねて「この地域でできることありませんか」と相談したのです。そうしたら当時PTAの副会長としてベルマークの活動をされていた蟹江さんを紹介されたので、ベルマークの活動に協力するなど、まずはお互いできることから始めていきました。そうやって活動しているうちに、蟹江さんは当社のパートナー社員に、さらには正社員になり、一般社団にも関わってもらい、同時に地域コーディネーターでもあるので、地域とスリーハイをつなぐ重要な役目を担ってくれるようにな

りました。よく「どうやってたらそんなにうまくいくの？」という質問をされますが、蟹江さんのような存在があったことは大きな要因だと思えます。  
江森：学校の方の反応はどうだったんですか？  
男澤：なんか最初はすごい疑われたという話を後で聞いて、心外だなあと思いましたよ（笑）。  
蟹江：校長先生が心配されて「何が目的だと思っ？」と相談されたりはしましたね（笑）。  
江森：学校ってそういうものですよ。企業は金儲けのことしか考えていないと思ってるふしがあります（笑）。  
男澤：それがきっかけで蟹江さん以外の地域コーディネーターの方とも知り合うことができました。地域のことや学校のことなどいろいろな教えていただくことができました。そうするとこちらも地域に対して感謝の気持ちが生まれてきて、ますます何か恩返しをしたいという気持ちになる。そしてその活動に対して地域の方がまた感謝を返してくれるという、いい循環ができています。CSRってこういうことなんじゃないかと思いはじめています。  
江森：このスペースも工業地域には似合わない（？）、とても素敵な空間ですけど、これはどういった目的でオープンしたのですか？  
男澤：この地域は準工業地域といって、完全な工場地帯ではなく、工場と住宅が隣接している地域なんです。周辺に住んでいる人たちは比較的新しい住民が多くて、港北ニュータウンに憧れて引っ越してきたら隣は工場だった！という人たち。一方、工場の方は「後から来ていて文句言うなよ」と思っているの、企業と住民の「コミュニケー

ションがうまくとれているとはいえない状況です。だからもっと企業と住民が顔の見える関係をつくらなきゃいけないと以前から思っていました。でも1年ぐらい前から、逆にこの地域おもしろいなと思いはじめまして、このおもしろさを街の魅力としてもっと発信できないかと思いつて作ったのがこの「DEN」なんです。  
江森：なんか、隣で作業している人がいてさっきから気になっているのですが…。  
男澤：この人たちはスリーハイの社員で、いま当社の製品であるヒーターを作っています。「DEN」は「ものづくりカフェ」をコンセプトにしている、ものづくりを見ながらお茶をしたり、実際に自分がものづくりをしたりすることができます。運営は一般社団ですが、スリーハイとしても「見える工場」として、打ち合わせやショールーム的な用途として活用しています。  
江森：場と組織ができて、これからますます楽しみですね。  
男澤：今の自分を動かしているのは、未来に対する危機感です。それを行政にどうしろこうしろと言っても始まらない。自分たちでやった方が早いし、成果もあがります。せっかくなので世に生を受けて生きてきた以上、何かひとつでも爪跡のようなものを残せるように、これからも活動していきます。



DEN「何がひらめく場所」ものづくりでつながる新しいスタイルのカフェをコンセプトに、一般社団法人横浜もの・まち・ひとづくりが横浜市都筑区東山田の工業地域で運営している。カフェのほか、「ワーキングスペース」「セミナー」ものづくりワークショップなども利用可能。  
<http://den.yokohama/>

# 寄付月間2017

# 神奈川県では「寄付toカタログプロジェクト」が始動!

## 12月は寄付月間

寄付月間 (Giving December) は、NPO、大学、企業、行政などが幅広く集い、寄付が人々の幸せを生み出す社会をつくるために、毎年12月の1か月間に展開する全国的なキャンペーンです。この寄付月間を通じて、一人ひとりが寄付について考えたり、実際に寄付してみたり、寄付月間についてソーシャルメディアで広げたりすることや、寄付を受ける側が寄付者に感謝するきっかけになることを目的としています。

昨年は、397の法人が賛同パートナーとしてこの活動に賛同し、71の寄付月間公式企画が実施されました。また静岡県庁に

垂れ幕が期間中掲載されるなど自治体からの参加も広がりました。

## 神奈川県ではNPO・企業・行政の「トライセクター」協働のプロジェクト実施

昨年の寄付月間をきっかけに、日本ファンドレイジング協会認定の「ファンドレイザー」の資格を持ったNPOのメンバー（FRK）、地域貢献に励む企業のメンバー、神奈川県行政が集い、寄付文化を育むための交流を開始、12月には3者協働で「かながわ寄付月間フォーラム2016」を開催しました。

そして今年、昨年のメンバーが再結集し、

新たな寄付のためのプラットフォーム作りが始まっています。その名も「寄付toカタログ」。プロジェクトに参加する8つのNPOと企業が、それぞれの寄付アイテム（カタログ）の名称にちなみ、あえて「寄付商品」と呼んでいます。カタログに掲載、自団体だけでなく、8団体すべての寄付商品を相互に紹介します。それによって、それぞれの活動を広く周知することができるだけでなく、社会課題の多様性を知り、より寄付者の問題意識に近い寄付先を選んでもらえるようになることを期待しています。

NPOと企業が同じ目線に立ったこの画期的なプロジェクトを、神奈川県行政もしつ

かりバックアップ。12月4日には、みなとみらいイノベーション&フューチャーセンターにおいて、「かながわ寄付月間フォーラム2017」も開催決定。  
寄付toカタログご希望の方は協進印刷までお問い合わせください。



3Rはご存知ですか? そう、リデュース (Reduce)、リユース (Reuse)、リサイクル (Recycle) です! 身の回りには不要だけどそのまま捨てるのはもったいない、何かの代用にはならないかな? を元パタンナーMと元アパレル販売員Mの「WM (ダブルエム)」で、ちょっと役に立つ (…かもしれない) ものをご紹介しますという企画です。時にはまったく役に立たないものもあるかもしれませんが、そこはご愛嬌! ということで、どうぞ温かい目でお付き合いください。

さて、やってまいりました第2回。最近お腹周りのボタンがきつくなって… くたくたになるまで活躍してくれた… なんてYシャツはありませんか? そんなサラリーマンに無くてはならないYシャツがなんと、女子の好きな可愛いアイテムに変身してしまうのです! 作り方もとっても簡単! ご覧あれ〜。

## 「最後にもうひと花咲かせます!」 Yシャツコサージュ

1. 不要になったワイシャツを直径10センチの花びら型にカット
2. 水に洗濯糊を溶かして、その中でくしゃくしゃの形にし、そのまま乾かす
3. 完全に乾いたら、布をあまり広げずに球体になるように重ね縫い、止めていく

はい、完成。

子ども服で作ったら、子どもにもよく合う可愛いコサージュもできますね。小さくして、ヘアゴムにしてもいいかも☆

秋の夜長にどうぞお試しください!



## 納涼夜店

大口の魅力を紹介する『大口自慢』。今回ご紹介するのは、大口通商店街の夏の風物詩！納涼夜店です。

商店街の一大イベントである納涼夜店は実に40年以上も続いている、まさに名物イベント。今年は8月26日、27日の2日間にわたり開催されました。いつもは自転車ですすい通れる道が、この日は浴衣姿で楽しむ親子連れや地元小学生、遠方からのリピーターで、人、人、人！2日間で3万人が訪れたというから驚きです。

380メートル続くアーケードには、商店はもちろん、地域の団体や学校からの出店も多く、大口台小学校のかき氷屋さんでは、先生やPTA役員、校長先生、副校長先生までがエプロン姿でお出迎え。夏休み中の出来事を元気に話す子供たちに、笑顔でかき氷を渡す姿が見られました。



他にも、定番の焼きとうもろこしや焼きそば、金魚すくいにどじょうつかみ、横浜ひねろう会の見事なバルーンアート、子供向けのゲームなどたくさんのお店が並びます。お値段がリーズナブルなのもうれしいところ。日が暮れてこれぞ夜店という時間帯にはすでに品切れというお店もありました。

商店街中ほどのステージでは、浦島中学校や横浜創英中学・高校の吹奏楽部、横浜商大高校の和太鼓や地元ミュージシャンのライブも繰り広げられ、こちらも大変な盛り上がり。納涼夜店の安全を守るため、小中学校のPTAのお母さんたちの見回りパトロールも行われ、地域の絆と大口の元気を感じた夏の終わりでした。

# 大口自慢

大口通商店街

横浜市横浜市中神奈川区大口通

JR横浜線大口駅下車3分

定休日：木曜日・土曜日の店舗多

## Kyoshin TODAY

### 母校にCAPを贈りました

認定NPO法人エンパワメントかながわが展開する、人権教育プログラムCAP (Child Assault Prevention) の普及企画「母校にCAPを贈ろうプロジェクト」。このプロジェクトのきっかけにもなった大口台小学校（弊社代表江森の母校）の3年生にCAPを贈りました。

プログラムを体験した子どもたちの感想は「楽しかった〜」。何事もまっすぐ純粋に受け取ることのできるこの年齢にCAPと出会えることは、彼らにとってもとても大きな財産になると感じます。まずは地元の子どもたちからCAPが広がることで、ひとりでも多くの子どもが自分の力で暴力から身を守り、安心・自信・自由な子ども時代を過ごして欲しいと願っています。



家族にもCAPのことを話せるように、協進印刷プレゼンツのオリジナルCAPウォーターを子どもたちにプレゼントしました。

### 8月のありがとこの日は「イベント企画のプレゼント」

記念すべきJO創刊号の巻頭対談を飾っていただいた畑中さんが所属するNPO法人びーのびーのが、昨年オープンさせた地域交流スペース「COCOシのはら」。8月のありがとこの日は、この施設の利用者向けイベント企画をプレゼントしました。

今回の目標は、「初めての来場者を増やすこと。」「知られざる横浜」の話聞けるイベントであれば興味を持ってもら

## ブログもチェック！ <https://kyoshin-blog.com/>

えるのではと考え、建築家の笠井三義さんに、「ヨコハマ歴史探訪く変わりゆく風景と受け継がれる景観」をテーマにご講演いただきました。

参加者からは「大変楽しい時間をありがとうございました」「今後も続けて欲しい」など嬉しい感想をいただいた上に、3割を超える方が初めてのご利用と目標もクリア！これからも期待にそえるような企画を立てなくては！と使命感に火が付いた1日でした。



### 地元高校・短大からインターン生

昨年に続き、横浜総合高校と神奈川県産業技術短期大学校からインターン生を受け入れました。10代の初々しさと、あふれ出る元気がとても眩しく映りました。2名とも約1週間の研修期間でしたが、学校とはケタ違いの情報量に、現実社会の厳しさも少しは感じ取ってくれた様子。

後日学校で開催された報告会では研修で得たたくさんの経験を立派に発表してくれました。これからの人生で、いつかこのインターンシップの経験が役立つ日が来れば嬉しいです。



JO（ジェイ・オー）2017年10月号（第21号）

発行者：株式会社協進印刷

横浜市神奈川区大口仲町108番地

TEL：045（431）6611

FAX：0550（3730）6273

URL：http://www.kyoshin-print.co.jp

